

陰陽について

「陰陽」とは、漢方医学の基本理念となるもので『すべての物事は陰と陽の対立する性格をもつ』とされる。古代中国の哲学思想に基づいた相対的なとらえ方として成立し、天と地、昼と夜、熱と寒など物事を2元的にとらえ、両者が自然に調和している状態が良いとする考え方である。

「陰陽」の概念は対立(相反するもの)、互根(依存関係にあるもの)、消長(バランスをとっているもの)、転化(循環するもの)の4つによって成り立つ。

この考え方は生体についても同様で、漢方医学において「陰陽のバランス」がとれている状態が健康であり、崩れた状態が病気である。生体の陰陽は、活動的、熱性のものを陽性として、非活動的、寒性のものを陰性として考える。患者様の身体が陽性的の場合、陰性の漢方処方を用い、身体が陰性的の場合、陽性の漢方処方を用いる。また、生体の陰陽でも4つの基本理念が成立するので、陰・陽は経時的に変化し、常に同じではないことに注意していただきたい。

生体における陰陽の鑑別は以下のようなものである。

陽	陰
・代謝の亢進傾向 ・発汗過多 ・血圧の高い傾向 ・体温が高い傾向	・代謝の低下傾向 ・発汗が少ない ・血圧の低い傾向 ・体温が低い傾向

「陰陽」はけっして難しくとらえる必要はない。あくまでも基本理念であり、身体のバランス(生体の陰陽)を重視した治療方針なのである。

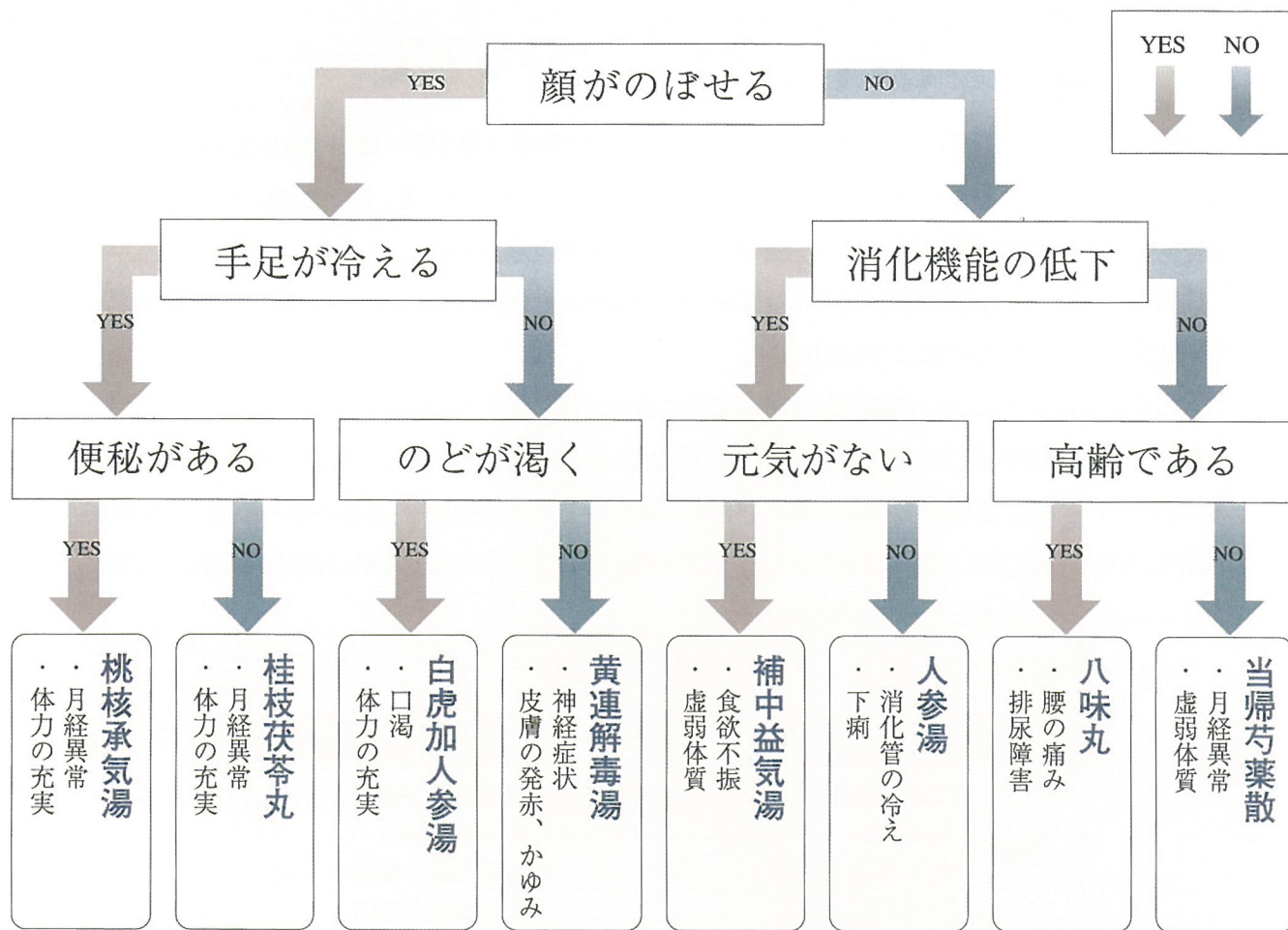
漢方の名称

漢方薬の名称は非常に紛らわしいもの、読みにくいものまで様々である。だが、いくつかのパターンが存在する。まず語尾の部分については、〇〇散というのは本来散剤として用いられてきた処方、〇〇湯とは煎じ薬として用いられてきた処方である。

また、効能により名称がついている処方もある。補中益気湯は中焦を補い(消化機能改善)気を益すという作用そのものの名称である。黄連解毒湯はオウレンという生薬が解毒作用として働くといった(生薬名)+(効果)という処方もある。他にも組み合わせた生薬そのものの名称として芍薬甘草湯(配合:芍薬+甘草)や大黄甘草湯(配合:大黄+甘草)なども存在する。

そのパターンを覚えていただければ、葛根湯加川芎辛夷のような長い漢方薬の名称も葛根湯にセンキュウとシンイという生薬を加えた処方だと類推できるのである。

漢方処方診断 冷え



▶ 漢方処方解説②

陰陽の理念から処方を選択する場合、陰証（身体が陰に傾いている場合）の患者様には、バランスを改善する為に陽性の処方を用いる。陽証（身体が陽に傾いている場合）の患者様には、陰性の処方を用いる。

陽性の処方としては、温薬や補薬があげられ、衰弱した身体を治療する働きがある。その代表としてニンジンやブシ、カンキョウを配合した補中益気湯や八味丸があげられる。

陰性の処方としては、寒薬や瀉下薬があげられ、機能の亢進した状態を抑え治療する働きがある。その代表としてダイオウやセッコウを配合した桃核承気湯や白虎加人参湯があげられる。

西洋医学では冷えは「冷感性」として病気とは捉えられることは少ないが、漢方医学においては「冷感症」として捉えられ、処方を選択する際に必要な要素となる。また、冷えを改善することによって主訴の改善も同時に見られることが多い。一概に冷えと言っても手足は冷えるが顔がのぼせる場合もあるので、その場合は陽証として考え、陰性の処方を用いる。この場合は女性であることが多く、月経異常、更年期障害の場合によくみられる。補中益気湯は冷房病や夏ばてまで広く用いられる処方であり、患者様の体力を充実させる。また、近年ではMRSAの治療・予防にも有効であるとの報告がある。